ヨハネの手紙

語り直し、
解き明かし、
今日のために。

GOOD NEWS

ヨハネの手紙

語り直し、解き明かし、今日のために。

Hans-Jörg Ronsdorf

わたしが生きるので、あなたがたも生きることになるからです。

ヨハネの福音書14章19節

ヨハネの手紙を自分のことばで言い換え、つまり説明を加えながら語り直しています。分量は、古典的な聖書翻訳における元の聖書本文のおよそ三倍です。

ドイツ語版 第1版 2020年6月

© Hans-Jörg Ronsdorf – 無断転載を禁じます

www.hans-joerg-ronsdorf.de

Albis 6 ½

87477 Sulzberg

hj-ronsdorf@t-online.de

ドイツ語版のISBN 978-3-9820715-4-1

表紙デザイン：トビアス・シュトリッカー（Tobias Stricker）

なぜ聖書を読むのでしょうか

この小さな冊子が、あなたの手元に届きました。扱うのは、ヨハネという人が書いた一通の長い手紙と二通の短い手紙です。今から二千年近く前のことです。そのような古代の文書が、今日でも意味を持ちうるのでしょうか。もちろんです、書き手が特別なことを体験したのですから――彼はナザレのイエスを知っていました。イエスを自分自身で体験したのです。それが彼の手紙に、比類のない価値を与えています。だからこそ、この手紙はほとんど最初から、今日私たちが新約聖書として知っている文書の集まりに加えられたのです。

あなたは神を知りたいと思いますか。神についての真理は、あなたにとって大切ですか。神を本当に知ることが、ヨハネの福音書でもこれらの手紙でも、全体を貫くテーマです。

このヨハネの手紙は、人間の尺度で言えば、境界を越えています。向こう側から知らされた者でなければ、誰も越えることのできない境界です。この手紙は、いちばん澄んだ湖、いちばん高い山、いちばん美しい花、いちばん堂々とした獅子、いちばん美しい絵のようです。どんな文学の傑作も、この手紙には足元にも及ばず、その視界にさえ入りません。ソクラテス（Sokrates）も、プラトン（Plato）も、クセノフォン（Xenophon）も、誰ひとり及びません。この手紙は、神の愛の花火です。そして神の聖さの花火です。

神学者たちが今日、最良の研究によって何を推測し、どんな仮説を組み立て、組み合わせようとも、この手紙はそれに動じません。もしこの手紙がなかったなら、新約聖書には欠かせない礎石が一つ欠けていたでしょう。この手紙があることを、神に感謝します！

この手紙は今日にとってどれほど身近で、意味があるのでしょうか

一世紀のキリスト者たちの考えと体験は、今日の信者にとって大切です。彼らもまた、自分たちの複雑で多元的な社会の中で、忠実に生きようとした人たちだったからです。当時も今も、どうすれば忠実に生きられるのかを正確に知るのは、いつも簡単なことではありません。この初期のキリスト者たちは、私たちの手本になりえます。

互いに矛盾する宗教や哲学ですでにあふれていた世界、つまり私たちの世界とよく似た世界の中で、イエスは言われました。「永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです」（ヨハネ17:3）。イエスは永遠のいのちを、神を知ること（認識すること）と定義しておられます。なぜなら、神が人類にご自身を現されたことに私たちが応答することによってのみ、私たち一人ひとりは神を知ることができるからです。そしてそこから、神とともに生きるいのちが始まります。それを味わうのです。今も、そして永遠に。これは、歴史のどの時代、どの場所に生きるどの人にとっても大切なテーマです。そして、この手紙のテーマなのです！

手紙の背景と執筆のきっかけ

読む人は誰でも、これらの手紙が分裂と混乱の時代に書かれたという印象を受けるかもしれません。分裂と混乱は、とりわけ、ヨハネ共同体と呼ばれる受取人たちの間で起こっていました。それでも私たちは、誤った教えと迷いを具体的に再構成しようとはしません——それはこれまで十分に試みられてきましたし、今も試みられています。これらの手紙に示されている真理は、キリストについてのさまざまな誤った教えに対して語られ、持ち出されうるものです。そうした教えは、グノーシス主義や仮現説、あるいはケリントス（Kerinthus）の教えといった形で存在していました。その誤った教えをそこまで正確に再構成できるだけの証拠は、十分にありません。ですから、それはしないのが最も賢明だと思われます。**これらの手紙は数多くの誤った確信に語りかけていますが、その多くは今日も私たちの間にあるものです。**

この手紙が送られた状況を考えると、三つのテーマが際立っています：

キリスト論――イエスとは誰か、そしてなぜそれが大切なのか

イエスを、肉となって来られた神であるキリスト、神の御子として告白することが、これらの手紙の中心にあります。キリスト論とは、イエスが誰であるかについての教えです。初めから弟子たちには、イエスについての真理は侵すことのできないもの、決して手放すことのできないものだということが、はっきりしていました。イエスについて誤った教えを持てば、キリスト教信仰全体が崩れてしまうでしょう。イエスが本当に人間であったことを否定するのは、人間イエスとその救いをもたらす苦しみが持つ、救いの意味を否定することです。

このキリスト者たちの中から出て来た偽教師たちや惑わす者たちが、いったい何を広めていたのかについては、私たちは推測することしかできません。エイレナイオス（Irenäus）が伝えている二世紀の伝承によれば、教会の指導者たちは、人間イエスと霊的なキリストとをはっきり区別すべきだと主張していたケリントスという男に反対しました。ケリントスは、イエスは優れた賢い教師ではあったが、それ以上の者ではないと信じていました。一方でキリストは霊的な存在であり、イエスがバプテスマを受けたときに人間イエスの上に下り、十字架で死ぬ前に再び彼を離れた、というのです（5:6–8参照）。

二世紀のもう一人のキリスト者、イグナティオス（Ignatius）は、信者たちに「仮現説的な」キリスト論について警告しています。仮現説（ドケティズム）という語は、「〜のように見える」という意味のギリシア語 dokeô から来ています。仮現説の人々は、イエスは人間であるように「見えた」、あるいは人間で「あるかのようだった」だけで、苦しんで死んだのも「そう見えた」だけだと教えました。さらに、少し後になって、キリスト教に挑戦するもう一つの運動、グノーシス主義が現れました。この手紙は、もしかする

と、これら三つの流れの最も初期の段階に向けられているのかもしれません。

神の愛、神への愛、そして隣人への愛

もう一つの大きなテーマ、いや、最も大きなテーマと言ってもよいのが、神の愛、「アガペー」（agape）です。このテーマは、ヨハネのキリスト論的な関心と切り離せないほど織り合わされています。

著者は私たちに、互いに愛し合うようにというイエスの戒めを守ることが、交渉の余地のない中心的な意味を持つことを思い起こさせます。愛こそが、真理と、神から出た本物のいのちを見分けるテストなのです。

二元性――二つに分かれていること

これらの手紙を注意深く心に刻む人は、何度も対立する組み合わせに出会います。ヨハネの視点は、光と闇、真理と偽り、いのちと死、愛と憎しみ、……そして（あるいは、この）世と、「『世』からのものではない」ものとの二元論によって、根本から形づくられています。ヨハネの経験する世界は、はっきりと二つの陣営に分かれています。一方には、神、イエス（神の代理者）、御霊、そして神の子どもたちがいます。もう一方には、神に敵対する陣営があります。この敵対者に属するのは、悪魔とその子どもたち（ヨハネの手紙第一3章8節）、反キリスト（たち）（2:18、22、4:3、ヨハネの手紙第二7節）、反キリストの霊（ヨハネの手紙第一4章3節）、そして悪い者の影響の下に陥った世です。ヨハネにとって、ある人の忠誠がどこにあるのかを見定めるのは簡単です。人の行いがすべてを物語っていることは、ヨハネの手紙第一3章10節が示すとおりです。「神の子どもたちと悪魔の子どもたちは、このようにして明らかになります――正しいことを行わない人は皆、神から出た者ではなく、自分の兄弟姉妹を愛さない人も同じです。」

ですからヨハネは、その言い方においても世界の見方においても、灰色の領域を知りません。今日の私たちなら、白か黒か、と言うでしょう。ほとんどデジタルな見方です。私たちには耳慣れない響きです。けれども、ヨハネを理解しようと努めるなら、彼の取り組み方は今日の私たちにとっても、いろいろな点で助けになります。

よく耳にする、もっともな反応は、ヨハネがこれほど大切にしていることはとても果たせそうにない、というものでした。能動的で、自分を捨てる愛は、ヨハネにとって順位表の第1位です。何の条件も留保もありません。交渉の余地はありません。どうしたらそのように愛せるでしょうか。そして、どうしたら罪を犯さずにいられるでしょうか。ヨハネの基準は高いのです。本当は届かないほどです。それを100％満たさない人は、外にいるのです。そうです、この極端な描き方は、私たちを不安にさせるかもしれません。私

たちの生活は完璧ではないからです。まったく罪がないわけではありません。ヨハネはそれを知っています。神から生まれた者は罪を犯さない（3:6、5:18）と言いながらも、彼は、私たちがまだ罪を犯すことをよく知っています（2:1）。ヨハネの考え方ではこれは矛盾ではなく、私たちにとっても矛盾である必要はないのです。

書き手は誰か

これらの文書は伝統的にヨハネという人物と結びつけられていますが、その伝承を裏づける内部の証拠はありません。**実際、三つの文書はどれも匿名です**。ヨハネはあいさつも呼びかけもなしにいきなり議論に入り、ヨハネの手紙第二と第三は、古くからよく知られた手紙の形式に従っていて、差出人を単に「長老」と呼び、個人名は挙げていません。おそらく、ヨハネの福音書の著者と、さらに黙示録の著者と同じ人物でしょう。それがイエスの弟子、つまり十二人の一人であったことを示す点は多いのですが、別のヨハネであった可能性もあります。つまり、同じ名前を持ち、やはり主の弟子であった誰かです。もしかすると、七十人の一人だったのかもしれません。

手紙の構造と目的

この文書は、おそらくもともと著者の教会で説教として用いられ、その後、周辺の諸教会に配られたのでしょう。それは、ヨハネの福音書に土台が据えられているようなヨハネの伝統に、聞き手がしっかりとどまるように、それを守り、強め、あるいはそうするよう促すことを目的として書かれました。

神学者たちは、この手紙を「演示的弁論（エピデイクティック・レトリック）」と見なすことができると考えています。聞き手がすでに持っている価値観に、さらにしっかりとどまるよう強めることを目指す弁論の一種です。クルーズ（Kruse）の考えは示唆に富んでいます。「これらすべての結論は、私たちはヨハネの手紙第一を、パウロの手紙を読むときのように議論の筋道を見つけようとせずに読むべきだ、ということである。著者は何かを証明しようとしているのではなく、むしろ、偽教師たちの教えと倫理という脅威に直面している読者を強め、キリスト教共同体の伝統的な真理にとどまらせようとしているのである。」

私はこの手紙を何度も読んできましたが、構造や筋道、議論の流れを見つけるのにいつも苦労しました。その構造は、そのジャンル、つまり文学上の種類と同じくらい特定しにくいのです。明らかな全体の設計図はありません。引き締まった構造を見つけようとする試みは、たいてい作為的で、説得力のないものになってしまいます。**構造を説明するのに、らせんのイメージを用いる人たちもいます。思考は直線的というより、むしろ円を描いているのです。**著者は、互いに絡み合った同じテーマ――罪、愛、健全なキリスト論――に何度も立ち返り、ほかの二つについて語られたことの光の中で、それぞれをさらに展開していきます。

区分は、たとえば次のようになるでしょう：

	第1サイクル	**第2サイクル**	**第3サイクル**
	1:1–2:28	**2:29–4:6**	**4:7–5:21**
啓示	神のいのちの啓示（1:2参照）	神の御子と神の子どもたちの啓示（3:2、5参照）	神の愛の啓示（4:9参照）
テスト	神との交わりの告白が、次のものによって試される a) 正しい歩み（1:5–2:6） b) 真実な愛（2:7–17） c) 正しい教え（2:18–28）	神の子どもであるという告白が、次のものによって試される a) 正しい歩み（2:29–3:10） b) 真実な愛（3:11–24） c) 正しい教え（4:1–6）	神のいのちと愛が、次のものによって証明される a) 愛（4:7–21）、 b) 従順（5:1–5）、そして c) 信仰 ――神の子どもたちの（5:6–21）
乗り越えるべき障害：世	その魅力によって、私たちを父の心から引き離そうとする世（2:15–17）	世と、神の子どもたちに対するその憎しみ（3:13–15）	神の戒めを守ることを難しくする世（5:3–5）
警告	偽キリストたちへの警告（2:18–29）	偽りの霊たちへの警告（4:1–6）	偽りの神々への警告（5:18–21）

図式：アロイス・ヴァーグナー（Alois Wagner）

ヨハネの手紙第一

ことばであるイエスについての使徒の証し――父のもとから来て、父のもとへ導く方 1:1–4

イエスが私たち十二人をご自分の弟子として召されたとき、まったく新しいことが始まりました。私たちはそれを聞き、見て、触れたのです。本当のいのちの始まりです。神が私たちのために思い描いておられたとおりのいのちです。すべてを変えた何かの始まりです。そして、決して終わることがありません。それは、ことばであるイエス、ロゴス（LOGOS）のことです。彼は本当のいのちを明らかにされました。私たちのために。

私たちは、初めから起こったことを証しし、伝えます。いのちのことばである方から、私たちが聞いたことです。それは単なることば以上のものでした。そのいのちを見て、驚嘆することができたのです――そうです、触れて、抱きしめることさえできました。彼は私たちと同じ**人間**で、私たちは三年間その方に従いました。私たちは間近でその方を体験したのです。私たちは証人であり、それをあなたがたに告げ知らせます。疑いの余地はありません――彼は父のもとから来られたのです。

神のいのち、神ご自身の永遠の存在そのものが、ナザレの建築職人であるイエスのうちに、私たちのところに来ました。私たち使徒も、ほかの多くの人たちも、それを見ました。私たちは、この途方もない知らせをあなたがたに告げ知らせる証人です。永遠のいのちそのものである御子は、神のもとから来られました。御子ご自身が、自分は天の父から遣わされたのだと、繰り返し私たちに告げてくださいました。父は、御子が私たちのところに来ることを望まれました。神のこの栄光に満ちた、力強い、永遠のいのちを内に宿している御子です。だから御子は人となられました。神のいのちが私たちに届くことのできる、ただ一つの道です。私たちのいのちとなるためです。すべての人が、このいのちの贈り物を切実に必要としています。私たちは死に引き渡されているのです。神の御子が本当に人となり、私たちにいのちをもた

らしたことを否定する、あなたがたのところの人たちにも、このことを知ってほしいのです。**永遠のいのちは父とともにありました。父に向き合って。父と御子のいのちです。イエスによって、それは私たちのいのちとなり、私たちを父と結びつけます。父の子どもたちとして！**

私たちがイエスについて見聞きしたことを、すべてあなたがたに伝えなければなりません。あなたがたがそれを聞いて信じるなら、イエスが私たちの共通の中心となります。私たちを結び合わせる、すべてのものの心臓です。イエスのうちにこそ、ほかの誰のうちでもなく、私たちは互いに交わりを持っています。そして、信じがたいことに聞こえるかもしれませんが、天の父とその御子イエス・キリストとの交わりです。彼が私たちに、神のいのちにあずからせてくださったからです。

イエスによって、私たちは皆、あなたがたも私たちも、とにかくイエスに従う者は皆、心と思いを一つにしています。互いに属し合い、すべてを共有する一つの家族です。すべてを分かち合うのです。この結びつきの中に、三位一体の神の永遠の喜びが入って来ました。神の家族の中に届いたのです。地上の喜び、この世の喜びをはるかに後にする喜びです。これ以上大きくはなりえない喜びです。目覚めた心で、積極的に、手を動かしながら神の家族の交わりの中で生きる人は皆、その喜びを感じ、それに奮い立たされます。

神は最も清い光――神の光の中で生きる――イエスの血のもとでの赦し 1:5–10

けれども、気をつけてください！これらすべてがどれほど特別で比類のないものであっても、この交わりを脅かすものがあります。この交わりと神の近さに、まったくそぐわないものがあるのです。イエスのメッセージは、いつも明白ではっきりしていました。彼は、私たちがどうしてもあなたがたに伝えなければならない、とても大切なことを、私たち使徒に指し示されました。もしそうしなければ、私たちはあなたがたに対して罪を負うことになるでしょう――**永遠の神は聖なる方です。神ご自身が、最も清く、最も明るい光です。神は光の中に住んでおられます。神のうちには、闇の痕跡すらありません。**神は罪を受け入れず、ご自分の栄光に満ちたご性質に反するものと

は決して妥協されません。それは人間と、神の良い被造世界を壊してしまいます。たとえば、愛のなさ、感謝のなさ、自己中心、そして私たちにとって最善である神の良い戒めを軽んじること、それに反逆することです。このような闇は、神のうちには――そしてイエスのうちにも――何一つ見いだせません。もちろん、文字どおりの、あるいは物理的な意味での闇のことを言っているのではありません。私たちの心を霊的に暗くする闇のことです。私たちの生き方から方向を奪う闇です。罪と不義に感染し、光であるこの栄光の神から切り離されている状態です。

ですから、もし私たちが――あなたがたのところで何人かがそうしているように――この栄光の神と交わりを持っていると主張しながら、闇の中で、つまり神を問うこともせず自分勝手に生きているなら、それはまったくの嘘です。決して真理ではありません。けれども、イエスがただ一度で永遠に私たちを導き入れてくださった神の光の中で生きているなら、私たちは互いに、そして父とその御子とも、生きた、変わることのない交わりを持っています。神の光の中で、神の愛の中で、そして父の家の喜びの中で。

そもそも私たちは、この神の聖なる光の中で生き、そこにとどまることができるのでしょうか。私たちは何度も何度も失敗し、罪を犯してしまうではありませんか！そうです、できるのです。神に永遠に感謝します。私たちが神の光の中に永遠に住んでいられる理由は、これです――**御子の血です！神の御子イエス・キリストが、十字架でご自分の血を、ご自分のいのちをささげられました。それによって、私たちは永遠に罪からきよめられています。このただ一度流された尊い血は、私たちがこれから罪を犯すかぎり、私たちをきよめ続けます。かつても、今も、これからも！**私たちはいつも神との交わりの中にいます。たとえ、まだ罪を犯すとしてもです。たとえ私たちの喜びが曇ったり、すっかり消えたりしても、神の家族から追い出されることはありません。

イエスの血こそ、私たちの永遠の安全であり保証です。私たちの従順や不従順が、神との交わりを可能にしたり壊したりするのではありません。神は御子の尊い血を見ておられます――ただそれゆえに、私たちは永遠に安全なの

です。いつまでも。かつて過越の小羊の血が、すべてのイスラエル人をさばきから守ったのと同じです。**私たちは、自分のすべての罪からきよめられます。見落としている罪、忘れてしまった罪、自分では気づいていない罪からも。そして残念ながら、これから犯してしまう罪からもです。**

けれども、もし誰かが、偽教師たちが主張しているように、私たちにはまったく罪がなく、イエスの血によるきよめなど必要ない、と考えるなら、それは大きな誤りです。そのとき私たちは、真理と現実から外れて生きることになるでしょう。自分自身を迷わせることになるでしょう。私たちの罪は、私たちを滅びへと突き落とすでしょう。

罪がないというこの嘘と自己欺瞞から解き放たれる道は、ただ一つしかありません。**自分の罪を認め、神に告白するときにだけ、私たちは罪から離れることができます。そうしてはじめて、神がイエスの血によって私たちに与えようとしておられる赦しを受け取るのです。**認めて告白すること、つまり自分で気づいている罪を口に出して言い表すことによってだけ、私たちは神との真の生きた交わりに入ります。父と、そして御子との交わりです。そしてまた、イエスのきよめる血のもとに生きている、イエスに従うすべての人たちとの交わりにも入るのです。赦しは、すべての罪に対して与えられます。もう一度言います——忘れてしまった罪や、気づいていない罪もです。そして、これから犯す罪もです。

神が私たちの罪を取り除いてくださることに、私たちは値するのでしょうか、あるいは、それを求める何かの権利があるのでしょうか。いいえ！けれども、私たちのためにいのちを与えてくださったイエスこそ、神が赦してくださるという確かな保証です。イエスの尊い血とは、彼の聖なる、罪のないいのちのことです。**彼はそれを私たちのためにささげられました。私たちのためのこの自分を捨てた、従順ないけにえは、神にとって計り知れない価値を持っています。だから神は、自分の罪を誠実に、率直に、正直に告白するすべての人を、喜んで赦してくださいます。神はそうすることを、ご自分に義務づけられたのです。御子のこの血に基づいて。神はいつもご自分のことばに忠実です！神は真実で正しい方だからです！**

すべての人が知らなければならないことなので、もう一度言います――生まれたままの人間としての私たちも、あるいは神の子どもたちも、自動的に罪なく生きている、と主張する人は、自分自身を欺いています。さらに悲劇的な自己欺瞞は、罪を犯しておきながら、それは罪ではないと考えることです。そうすれば、私たちは神を偽り者とすることになるからです。神は、何が罪であるかを私たちにはっきり示してこられたのです。自分には罪がない、罪なく生きている、と本気で信じている人は、失われています。その人はイエスの血に頼らないからです。自分の罪を告白しないのです！私たちには、思いにおいても、霊においても、からだにおいても罪がない、と信じている人は、誤っています。これは、滅びへと導く誤った教えです。

キリスト者が罪を犯すとき――私たちの弁護者、義なるイエス 2:1–2

私の愛する友の皆さん、信仰における私の子どもたち、これは私たちにとって当然のことで、本来なら書く必要もないはずです――**罪を犯さないでください！**永遠の、聖なる、栄光の神が、造られた者であり堕落した者である私たち人間を、ご自分の交わりに迎え入れてくださるのなら、私たちにとって罪はタブーであるべきです。神にとってと同じもの、つまり闇であるべきです。このことについて、神と同じように考え、感じましょう。罪に対する私たちの「否」が、成長し、増し加わりますように。

神との交わりには、自分の失敗を正直に見つめ、認めることも含まれます。なぜなら、正直に自問しなければならないからです――私たちのすることの中に、完全に清く聖なるものなど、そもそもあるでしょうか。残念ながら、私たちは毎日罪を犯しています。無意識に、そして時には意識して。何が罪であるかを知っていながら、それでも行ってしまうのです。けれども、神の子どもである私たちが、それでもまた罪を犯してしまったとしても、そのために失われることは決してありません。たとえ私たちがそう思っても、父と御子はそう思われません。彼らとの交わりは途切れません。小さくなることもありません。途切れるとすれば、この交わりの意識、それを実感することのほうです。結びつき、属していること、家族のきずなではありません。**な**

ぜなら、すべてがすでに赦されているからです。私たちは改めて赦しを必要とはしません。私たちのために死なれた父の御子イエスにほかならない方が、父のもとで私たちのためにいてくださいます。彼は、父のもとでの私たちの弁護者、助け主、支え手です。私たちを再び立ち上がらせてくださる方です。義なる方である彼こそ、私たちが神の子どもであり、これからもそうであり続けることの安全であり、保証です。天の父が完全に正しい方であるように、完全であったただ一人の方です。

私たちのすべての罪を、イエスはご自分の血によって消し去ってくださいました。滅ぼし尽くされたのです。**彼は、私たちの罪のための、完全でただ一度きりの罪の償いのささげ物です**。そして、全世界の罪のためのものでもあります。すべての人のため、被造世界全体のためです。

神は、私たちのうちにもはや何一つ不義なもの、汚れたものを見いだされません。なぜなら、神と人に対する私たちの罪、私たちの不義な行いはすべて、イエスの死のうちに償われたからです——赦され、取り除かれたのです。**彼のいけにえはあまりに大きく、尊いので、世界のすべての人のすべての罪を消し去ることができます**。キリストとそのいけにえのもとに避け所を求める人は誰でも、赦しを言い渡されます。

真理のテスト——告白と行いが一つであること 2:3–6

では、私たちがイエスを知っていて、彼に従っていることは、どうしたらわかるのでしょうか。単純に、私たちが彼の**戒め**を愛し、行っていることによってです。もし誰かが、イエスと生きた、人生を変える関係を持っていると主張しながら、彼の戒めを行わず、行おうとさえしないなら、その人は自分自身を欺いています。そしてほかの人たちをも。そのような人のうちに、神の真理があるはずがありません。けれども、イエスのことばを行う人のうちには、神の愛が住んでいます——そうです、目的地に到達しているのです。その人は神の愛を受け取っただけでなく、それに応え、さらにほかの人へと手渡してきたのです。

私たちが彼のことばを守り、行うなら、私たちはイエスのうちにいます。イエスとともに生きている、イエスに従っていると称する人は、イエスが生き

られたように生きる以外に道はありません。そのとき、イエスの愛、あわれみ、真理、聖さが、私たちのうちにも見えることがわかるでしょう。

古い戒めと新しい戒め――愛こそ最も大いなるもの、闇は過ぎ去る 2:7–11

愛する友の皆さん、私はあなたがたに、本当は新しい戒めを書いているのではありません。それは、イエスが私たち弟子に与えられたときには新しいものでした。振り返ってみれば、それは古い、もともとの、しかし今もなお有効な戒めです。あなたがたは、信仰によってイエスを受け入れたときにそれを受けました。同時に、それは永遠に**新しい戒め**です――**イエスによって、愛の戒めとして、まったく新しい次元を得た**からです。そのようなものは、それ以前には決してありませんでした。この愛の戒めは、まことにイエスのうちに生きていました――そして今日、私たちのうちに生きています。彼のいのちが、私たちのいのちにもなったのです。そうです、彼は私たちのうちに生きておられます！そのようにして、ただそのようにしてだけ、私たちは彼のように生き、愛することができるのです。イエスにあって、まことの光が世に来ました。それによって、来たるべき新しい時代が始まりました。闇はますます退かなければなりません。闇は私たちの心からも、生活からも追い払われています。私たちは神の光の中に生きています。そこが私たちの家です。そこで私たちはくつろぐのです。そして、闇が完全に消え去り、イエスがすべてを照らされる日が、まもなく来ます。

この光の中に生きていると主張しながら、自分の隣人を愛さず、かえって憎んでいる人は、必然的に闇に属しています。憎しみは闇の中を住みかとしています。そこで憎しみは思うままにふるまうのです。けれども、自分の隣人を愛する人は、光に属しています。神の光の中で、その人は安全であり、見ることができます。つまずくことはなく、信仰から離れ落ちることもありません。もう一度言わなければなりません――自分の隣人を憎む人は、闇の中にいます。闇の中を歩く人は自分がどこへ行くのかわからないので、それは致命的なことです。闇の中では、その人は盲目なのです。

神の家族と世 2:12–17

神に愛されている**小さな子どもたち**よ、私はあなたがたに書いています——あなたがたのすべての罪は、これから犯す罪も含めて、赦されています！その理由はただ、イエスにあって私たちに約束され、与えられている神のあわれみと真実だけです。そのお名前が、それを保証しています！

信仰の**父たち、母たち**へと霊的に成長したあなたがた——あなたがたは、何よりもイエスを知り、愛しています。

若い人たちよ、あなたがたも、そのような父や母になるでしょう。今、あなたがたはイエスによって、信仰のうちに悪い者、すなわち悪魔に打ち勝ちました。あなたがたは戦いに立ち向かい、しっかりと立ち続けたのです。

まだ信仰に入って間もない**子どもたち**よ、あなたがたは最も大切なこと、最も基本的なことを知りました——永遠の神が、あなたがたの天の父であるということです。あなたがたは、その父の愛の中に生きています。

父たち、母たちであるあなたがたに私が書いたのは、イエスについてのあなたがたの知識、イエスへの愛と熱心さが、あなたがたを、今ほかの人たちにとってなりうる者にしているからです。

信仰の若い人たちであるあなたがたに私が書いたのは、あなたがたがイエスにあって強いからです。何よりも、神のことば、つまりイエスが語られたすべてのことが、あなたがたにとって大切だからです。あなたがたはそれを行っています。イエスとそのことばによって、あなたがたは悪魔に打ち勝つことができました。悪魔が広めるあらゆる誤った教えも、悪魔が惑わした人々も、あなたがたを不意打ちにすることはできませんでした。

あなたがた皆さん、気をつけて、神やイエスなどどうでもよいと思っている人たちが愛し、行っていることを愛さないでください。それが世です。世に心を結びつけないでください。本当の愛は、ただ一つのものしか抱きしめることができません。信じない人たちのような生き方を望んだり、それをうらやんだりする人は、天におられる**父の大きな愛**を知りません。父の愛は、神から遠く離れた世に住まうことなど、とうていできません。そこでは歓迎さ

れないのです。これまで一度も歓迎されたことはなく、今も歓迎されず、これからも決して歓迎されることはありません。

世を何によって見分けることができるのか、何が世を突き動かしているのか、そうです、何が世を生かし、駆り立てているのかを、知りたいですか。

あらゆる**欲**に負け、それを思うままに満たすこと――金銭欲、名誉欲、アルコール依存、うわさ話と陰口、性、刺激を求める心、過食、そのほか多くのことです。

この世のもの、目に見えるもの、誘惑するものばかりを見つめる**目の欲**。そうして、本当に意味の満ちた生き方を、文字どおり見失ってしまうのです。

暮らし向きの自慢――見せびらかし、高慢、うぬぼれと人との比較、いじめ、能力や財産の自慢、そのほか多くのこと。

不治の病のように、これが人々を苦しめています。自分の人生の主人が自分であるとき、人はこのように生きるのです。神なしに、多くの人は自分自身を自分の人生の王と見なしています。神などいないかのように、すべてを自分のものにするのです。このような欲は、決して天の父から出たものではありません。ですから、いつの日か、この世の体制とともに永遠に消え去るのです。イエスが言われることを行うことが、世の滅亡から逃れる唯一の救いです。神のみこころを行うことが、未来への唯一の展望です。神の新しい、永遠の、聖なる、栄光に満ちた来たるべき世界を、光の中で体験する唯一の道です。永遠のいのちのうちに、いつまでも。

反キリストと反キリストたち 2:18–19

神の子どもたちよ、イエスとともに**終わりの時**が始まりました。イエスは、**反キリスト**、**偽りの救い主**が来ると言われました。けれども今、すでに多くの反キリストたちが現れ、キリスト気取りでイエスの位置に自分を据えています。彼らは、イエスに対しても私たちに対しても、敵対する立場をとりました。ですから私たちは、終わりの時が来ていると言うことができます。真理に対するこの反抗こそが、終わりの時、つまり、まことのキリストが来られるまでの最後の時代の特徴です。悲しいことに、この反キリスト的な人た

ちは、もともと私たちのところから出て来たのです。私たちの中からです。彼らは、自分たちは神の家族に属していると主張していました。けれども、それは本当ではありませんでした。もし本当にそうだったなら、彼らは私たちのもとにとどまっていたはずです。しかし神は、彼らの正体を明らかにされました——彼らは神から出たのではなく、悪い者から出たのです。彼らは私たちのところにいるべき者ではありません。彼らは皆、偽りを教え、広めているからです。

聖霊による油注ぎと、父と御子についての真理 2:20–29

私たちは皆、**イエスからの油注ぎ**を受けています。聖なる方からの油注ぎです。それは聖霊です。イエスが私たちの上に注いでくださったのです。聖霊が私たちに、イエスこそキリストであることを教えてくれました。父の永遠の御子であることを。私があなたがたに書いたのは、あなたがたがこれらのことを初めて聞くためではありません。あなたがたはすでにそれを知っているからです。それをしっかり保ってください。あの人たちの嘘は、真理とはまったく何の関係もありません。

では、イエスについて語る人たちの中で、どのような人を偽り者と呼ばなければならないのでしょうか。**ナザレのイエスが、神に選ばれたメシアであることを否定する人たちです！そのような者こそ、父と、その御子イエスを否定する反キリストです。彼は、神はそもそも父ではなく、御子を持つこともありえない、と言うのです。**ですから、イエスが父の御子であることを否定する人は、父を知ることも、父を自分の父とすることもできません。けれども、イエスが父の御子であると信じ、その立場に立ち、それを証しする人は、父なる神を持っています。その人は、まことに神の子どもです。あなたがたも、初めからそのように聞いてきました。それを売り渡すことのできない真理としてしっかり保つなら、あなたがたは神の光の中にいます。父と御子に結ばれているのです。

これをしっかり保ち、そのために立つ私たちには、父の比類のない約束が与えられています。父はその約束を、ご自分の御子、いのちのことば、人であるイエスにおいて果たされました——永遠のいのちです。死ぬべき人間であ

り、罪人である私たちが、永遠のいのちを受けるのです！罪と死は打ち負かされるでしょう。

このすべてを、私はあなたがたに書かなければなりません。あなたがたを惑わし、この栄光に満ちた、生き死にに関わる真理を奪おうとする人たち、巡回説教者たちが、あちこちを巡っているからです。あなたがたがイエスから受けた油注ぎについて、もう一度話しましょう。それは、あなたがたのうちに、あなたがたとともにとどまっておられる神の御霊です。ですから、あなたがたは、この惑わす者たち、偽り者たちから教えを受ける必要はありません。彼らに耳を貸さないでください。聖霊に信頼してください。聖霊が、何が真実であるかをあなたがたに教えてくださいます。父の御子イエスのそば近くにとどまっていてください。

そして今、私は前を見つめています、私の友の皆さん。イエスが、すべての人に見える形で天に現れる日が、私には見えます。それは、この上ない喜びの日となるでしょう。比べるもののない祝いの日、ついに私たちが主イエスに、五感のすべてをもってお会いする日です。この栄光の日をそのように迎えたいなら、今すでに、イエスが目に見える形で私たちとともにおられるかのように、イエスとともに生きましょう。そして、その日まで忠実に、熱心にイエスに従いましょう。そうしないなら、その日は私たちを不意に襲うでしょう。あるいは、私たちを恐れさせ、恥じ入らせるでしょう。そして願わくは、そのとき、あなたがたのうちのある人たちが実はイエスに属していなかったことが明らかになりませんように。

神がどれほど完全に正しい方であるかを知ったなら、私たちは、ある人が神から生まれ、新しく造られた者であるかどうかを見分けることもできます。つまり、その人が神の義を愛し、生き、行っているときです。

なんという贈り物でしょう――私たちは神の子ども、家路をたどる者 3:1–3

父なる神が、どれほど限りない愛で私たちを愛してくださっているか、あなたがたは本当に推し量ることができるでしょうか。神は私たちを、ご自分の子どもとしてくださったのです！ご自分から進んで。それは神の永遠のご計

画であり、みこころでした。誰も、反キリストも偽預言者も、それを私たちから奪ったり、疑わしいものにしたりすることはできません。本当なのです――**私たちは本当に神の子どもとなったのです**。神がそれを望まれました。

私たちの外見や、からだや、能力を見ても、この新しい子どもとしての身分は確かめられません。今はまだ、そのすべてが目に見えないのです。イエスも、外見からは神の御子だとわかってもらえませんでした。イエスも私たちも、ほかのすべての人と違うようには見えませんでした。世にとって、私たちはほかの人たちと同じです。信仰のこととなると、私たちは世にとってよそ者です。見てください、私たちは神の子どもです！私たちが将来持つことになる、神の子どもとしての栄光に満ちたすべての特質が、外からはまだ見えないとしても。

一つのことは、今すでに確かです――**神の子どもたちは皆、まもなく、栄光を受けたイエス・キリストと同じになります**。天に現れ、地上に来られる方とです。すべての人に見える形で。私たちはその方を、ありのままに見るでしょう。そして驚嘆するでしょう。その方のもとにとどまるでしょう。この瞬間と、そのあとに来るものを体験すること、この待ち焦がれた出会いこそ、私たちの希望の中心です。そのために私たちは生きています。この希望が毎日、その方にふさわしくないものを、妥協せずに私たちの生活からすべて取り除くよう私たちを動かします。その方の聖さと栄光と義にふさわしくないものを。こうして私たちは、今すでに、ますますその方に似た者となっていきます。そして、その方が来られるための備えができるのです。

罪、悪魔、そして神の御子 3:4–10

神などいないかのように生きる人は、実は罪人です。自分の永遠の目的を外している人です。神がその人を造られたのですから。神がその人を生かしておられます。その人は神に感謝すべきなのです。このような生き方は、不法とも呼ばれます。神と神の権威を否定する人は、無秩序の中に生きています。人間は、神なしに生きることによって、信じられないほど多くの罪を積み重ねてきました。神と人に対するこれらの罪を、なかったことにできる人は誰もいません。人間の手段では、決して取り返しがつきません。けれど

も、イエスはまさにそのために、私たちの罪を取り除くために来られました。イエスは罪を、まるで一度も起こらなかったかのように取り除くことがおできになります。そんなことは誰にもできませんでした！ただイエスお一人だけです。なぜでしょうか。イエスは少しも罪に感染しておらず、一度も罪を犯したことがなかったからです。**イエスこそ、私たちの罪を負い、滅ぼし尽くされた義なる方でした**。

イエスに従い、イエスが言われることを行おうとする人は、罪に従いません。神などいないかのように生きている人は皆、イエスを理解してもおらず、自分の人生の救い主、主として、イエスに服してもいません。

神の子どもたちよ、妥協しないでください！神の視点から見れば、いつも「あれか、これか」しかないのです！だから私は、灰色の領域については語りません。あなたがたが理解できるように、私はあなたがたに伝える真理を、文字どおり白と黒に分けて対比させて強調しているのです。神に従おうとし、神の戒めに従って生きる人は、正しい人です。イエスがその生涯において正しい方であったように。神などいないかのように生きる人は、罪を犯し、自分の人生の目的を外しています。そのような人は、悪魔が昔からずっとしてきたことをしているのです。悪魔は初めから神の権威を拒んできました。この無秩序を、悪魔は広めています。そうです、悪魔は御使いたちや人間を惑わして、同じことをさせてきました。罪を犯す人は皆、結局は悪魔にそそのかされ、悪魔の側に立っているのです。**しかし神の御子は、悪魔が引き起こしたすべてのことを打ち壊すために来られました**。悪魔のあらゆる悪いたくらみ、人々の生活に悪魔が残していった爪痕のすべてを。悪魔のわざが最後のことばを語るのではありません！それは今すでに見ることができます。神の子どもは皆、神から生まれたのであり、ですから、もはや罪に左右されたり支配されたりしていないからです。神の子どもが絶えず罪を犯し続けなくてもよいということ――それはただ、私たちのうちにある神のみわざです！神のいのち、神のことば、神の御霊が、神の子どもたちのうちに臨在しています。ですから、神の子どもたちが罪を愛し、父などいないかのように生きることは、まったくありえないのです。結局のところ、誰も自分の本当の性質を否定することはできません。それは神から出たものか、悪魔から

出たものかのどちらかです。ですから、このことについて誰も自分をごまかしてはいけません。神を問うこともせず、そのように生きている人は皆、神から生まれた者、神の子どもであるはずがありません。神の子どもは、何よりも隣人への愛によって見分けられます。イエスがなさったように、自分を捨てて、行いによって隣人を愛さない人は、神から生まれた者ではありません。その人は悪魔の子どもです。

神の子どもであることのいのちのしるしとしての愛 3:11–18

あなたがたが初めてイエスとその良い知らせについて聞いたとき、互いに愛し合うことこそが決定的なことでした。それが大きな違いを生んだのです。互いに愛し合うということは、いつまでも変わらずそうあるべきです。その反対の恐ろしい例が、カインの古い物語です。いちばん初めのころのことです。カインは、弟アベルを殺すことによって、悪魔、すなわち悪い者から出た行いをしました。なぜ彼はそんなことをしたのでしょうか。彼のしたことは悪でした。彼が悪い者から出た者だったからです。けれども、弟は正しい人でした。アベルは悪魔から出た者ではなく、神から出た者でした。

ですから、今日でもこのようなことが絶えず繰り返されていても、驚かないでください。善いもの、聖なるもの、正しいもの、愛に満ちたものを憎むことは、悪の本質に属しています。そうです、それを壊すことも。神なしに生きている人たちは、多かれ少なかれ私たちを憎んでいます。私たちが、神の望まれることを行おうとしていることを感じ取るからです。彼らと私たちの違いは、これ以上大きくはなりえません。**私たちは、神から生まれた者として、死からいのちへと救い移されたのです**。死はいのちを壊そうとします。殺そうとするのです。それは憎しみにほかなりません。

神の子どもの本当の、本物のいのちのしるしは、私たちが隣人を愛することです。とりわけ、神の子どもたちを。逆に言えば、疑いなくこういうことです——隣人を愛さない人は、今もなお死の中にいます。その人は神の子どもではありません。自分の隣人を憎む人は皆、カインと同じように人殺しでさえあります——実際に誰かを殺すにしても、頭と心でその人を憎むにしても。隣人を憎む人が永遠のいのちを持つことはできないということは、すべ

ての人にとって明らかであるはずです。たとえ一時的には、そう見えたことがあったとしても。

愛とは本当は何を意味しているのかを、私たちは何によって知るのでしょうか。**最も偉大な手本、そして本物の神の愛とは何かを示す基準を、私たちはイエスのうちに見ます**。愛ゆえに、イエスは私たちのためにご自分のいのちを差し出されました。十字架でそれをささげ尽くされたのです。イエスが私たちのためにそうしてくださったのなら、ほかにありようはありません――私たちも、神の子どもたちのために同じことをするのです。隣人のためにも。愛を生きるとは、すぐに他人のために自分のいのちを犠牲にすることだとは限りません。それはたとえば、ごく単純に、私が自分の持ち物で困っている人を助けることです。その人が切実に必要としているものを与えることです。隣人の苦境に心の奥底で心を動かされない人のうちには、神の愛があるはずがありません。隣人の苦境に気づき、心を動かされ、助けるためにあらゆるものを差し出すこと、それこそが神の愛の本質ではありませんか。

神の子どもたちよ、愛についてただ語り、多くのことばを費やすのはやめてください。本物の神の愛を、行いによって生きてください。開かれた心と、開かれた手で。自己中心的な動機なしに。

惜しみなく与える心は、天の父に信頼できる 3:19–24

隣人を助ける代わりに、私たちの心はしばしば、手放すべきものにしがみつきます。隣人のために自分のいのちと持ち物を手放すなら、私たちは真理のうちにいます。自己中心的な心が手放さず、自分を捨てて与えることを責めさえするなら、私たちは、私たちよりも大きな神の戒めの上に自分を置いていることになります。隣人を愛する必要などないと考えるとき、あるいは、ことばだけで終わってしまうときのことです。神は、私たちの心が手を差し伸べない動機も、助けることへの異議も、正確に見ておられます。私たちの心のこのような感情と疑いに、私たちは抵抗することを学ばなければなりません。そして、神の愛の戒めをもっと重んじなければなりません。**私たちの心が手放して、隣人を惜しみなく、自分を捨てて助けるとき、私たちは父に対して、自由で喜びにあふれた信頼を持つことができます**。私たちは、父の

子どもとして父に愛されているのですから。私たちは父に願いを申し上げ、父が私たちに贈り物をしてくださることを体験してよいのです。隣人の苦境を和らげるために私たちが喜んで与えるなら、父も喜んで私たちに与えてくださいます。私たちにとって父の戒めは大切であり、私たちはそれを喜んで果たすからです。こうして、私たちの生き方は父にとって喜びとなります。**私たちが喜んで与えるなら、父も喜んで与えてくださいます！**

父なる神は、私たちにこの二重の戒めを与えておられます――**御子イエス・キリストに全き信頼を置くこと**、すなわち、その栄光に満ちた偉大さに、そして彼がすべてのことに、本当にすべてのことに十分であることに信頼を置くことです。生きるときも、死ぬときも。**そして、互いに愛し合うこと**――イエスもそう言われたとおりです。この戒めを行う人はイエスのうちにとどまり、イエスもその人のうちにとどまってくださいます。イエスが私たちのうちにおられることを、私たちは知ることができるでしょうか。はい、聖霊によってです。聖霊は、体験する人にしかわからない不思議な仕方で、イエスがともにおられることを私たちに証ししてくださいます。聖霊は、そのことについての内なる確信と安らぎを私たちに与えてくださいます。御霊は、それを証しするだけではありません。イエスは、御霊がいつも、いつの時も私たちとともにいてくださるようにと、御霊を与えてくださったのです。

現実の争い――真理をめぐる戦い：イエスとは誰か 4:1–6

愛する友の皆さん、世には多くの**偽預言者**が出回っています。私がすでに話した、偽りの預言者たちです。私たちのところから出て行った者たちです。あなたがたが持っている神の御霊とは反対に、偽りの霊たちが、この預言者たちを通して語っています。ですから、あなたがたを教えようとする人を誰でも信じてはいけません。それが神から出たものかどうか、吟味してください。神から出た本物の御霊は、イエスについての真理を告げ知らせることによって見分けられます。すなわち、イエス・キリストが本当に人となられたということです。地上におられ、いつまでも人であり続けるということです。**イエスは、私たちの人間としての存在を引き受けられました。それに属するすべてのものとともに。ただし罪は除いて**。父のもとでは永遠の御子で

あったし、今もいつもそうであるにもかかわらずです。これを信じず、ほかの人たちの前で告白しない人は、神から出た者ではありません。その人は惑わしの霊、反キリストの霊に満たされています。この反キリストは、いつか公然と、大々的に、華々しく、人を惑わす姿で現れるでしょう。けれども、すでに今日、この霊は、そのような偽預言者たちやメシア気取りの者たちを通して働いています。彼らは、まことのキリストについての嘘を広めているのです。

神の子どもたちは、神から生まれた者です。あなたがたは偽りの預言者たちを見抜き、打ち負かしました。あなたがたのうちには、世の霊よりも強い**神の御霊**がおられるからです。彼らは私たちのところから出て行ったのですが、その霊的な出どころは神のうちにはありません。彼らの起源は、神を持たない、それでいて宗教的な世にあります。彼らは、世から出たこと、世が喜ぶことを語ります。世は彼らに注目します。それに対して、私たちは神から出た者です。神を知り、神を愛する人は、私たちを理解します。神から出ていない人は、私たちの言うことを理解しません。

それは、攻撃にさらされ、争いの的となっている状況です。問題は「あれか、これか」です——語っているのは、真理の御霊か、偽りと迷いの霊か、そのどちらかなのです。

愛、愛、愛 4:7–16

神に愛されている友の皆さん！互いに愛し合いましょう。なぜでしょうか。愛は神のものだからです。愛は神から出ています。神こそ、最も清く、最も深い愛の源です。神が愛するように愛する人は皆、神から生まれた者です。その人は神を知り、神を愛しています。神のように愛さない人は、神を知りません。**神の最も深い、永遠のご性質は、清く、聖なる、しみ一つない愛だからです**。まさにこの聖なる愛を、神は私たちに向けてくださいました。ただで与えてくださったのです。ご自分のひとり子、比類のない御子を世に遣わすことによって。御子が人となられたことによって、私たち人間はいのちを得ました。死と闇の地にいた私たちに、御子がそれをもたらしてくださったのです。

この愛は、まったく受けるに値しないものです。私たちが神に対して抱いていた愛への応答ではありませんでした。私たちのうちには、神を動かすような良いものは何もありませんでした。あったのは、私たちの数えきれない罪です。私たちが離れることのできなかった罪です。神はそれを取り去ろうとされました。**こうして神は、私たちを先に愛し、御子のいけにえによって私たちの罪を取り去るために、御子を遣わされたのです。私たちとの果てしない隔たりに橋を架けるために遣わされたのです。私たちの罪のための償いとしての御子です。御子の死のうちに罪を滅ぼし尽くすためです。十字架は、神の愛のメルトダウン（炉心溶融）のようなものです。**

愛する友の皆さん、私たちがこのように、あらゆる期待を超えて、受けるに値しないのに愛されたのなら、私たちはまさに、互いに愛し合う義務を負っています。私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにとどまってくださいます。そのとき、神の比類のない愛が、私たちのうちに生きています。私たちのうちで燃えているのです。私たちのうちで目的に達したのです。神は霊であり、誰も、どんな人も、神を見たことはありません。**けれども今日、神を目で見なくても、神について何かを見て、つかむことができるのです！神の家族が互いに愛し合う、その愛によってです。この愛のうちに、神はおられるのです。**

私たちが神のうちにいることを、どうしたら理解できるでしょうか。そして、神が私たちのうちにおられることを。神の御霊によって、私たちはそれを理解できます。神の御霊によって、この生きた、神に根ざした愛の交わりが可能になるのです。

私たち使徒とイエスの弟子たちは見ましたし、あなたがたに証しします――父は、私たちが失われていることを、本当にご覧になりました。私たちに出口がないことを。そして、御子を遣わされました。全世界の救い主として。すべての人のために、父は御子を遣わされたのです。

イエスが神の御子であると信じ、告白する人は、神との交わりを持ち、神と結ばれています。神が私たちに対してどれほど大きな愛を持っておられるかを、私たちは知り、信じました。**神は愛だからです。神のご性質のすべて**

が、最も清い、自らを与え尽くす愛です。神は愛することを愛しておられます。このようにご自身を現した神は、ほかにひとりもいません。それが神のすべてを決めているのです。神がなさること、神であられることのすべては、愛から出ています。この愛のうちに生きる人は、神のうちにとどまり、神もその人のうちにとどまってくださいます――それは、私たちが心から父に感謝し、隣人を愛していることによって見分けられます。

神の愛とさばきの日 4:17–19

神の愛は、私たちを完全に変えました。私たちは、神に対する大胆さと確信を贈り物として受けました。ですから、すべての人が聖なる、正しい神の前で申し開きをするさばきの日を前にしても、私たちは恐れません。そのときに意味を持ち、残り続けるのは、ただ、私たちがこの世でイエスが生きられたように生きたという事実だけです。それは、私たちがイエスのことばを行うときに当てはまります――神から生まれたすべての人にとって、それは当然のことです。たとえそれが、決して百パーセントうまくはいかないとしても。けれども、そのためにも、つまり私たちの生活のこの欠けや罪のためにも、私たちは恐れる必要はありません。**神への恐れは、決して神の愛の本質にはありません。むしろ反対に、神の完全な愛は、さばきの日への恐れを追い出します。そして、イエスのように生きられないという失敗への恐れも。**恐れとは、それ自体がすでに一種のさばきであり、絶望へと導きかねないものです。神と神のさばきをまだ恐れている人は、まだ信頼していません。その人は、神の愛とイエスの赦しによって、まだ安らぎに至っていないのです。

愛するために神から生まれた 4:20–5:3

私たちは神と隣人を愛します。神が先に私たちを愛してくださったからです。これは大切なことです、決して忘れないでください――神を愛していると主張しながら自分の隣人を憎んでいる人がいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛さない人が、どうして目に見えない神を愛することができるでしょうか。神を愛する人は当然、自分の隣人も愛する――この戒めを、私たちは神から受けています。神への愛は、目に見える世界で現れま

す。頭の中の、目に見えない理論の中ではなく、そこでこそ、神への愛は自らを証明しなければなりません。

イエスがメシア、すなわちキリストであると信じ、告白する人は皆、神の子どもです。神から生まれた者です。父とその子どもたちは、家族として愛によって結ばれています。神を愛する人は皆、当然、神から生まれた人をも愛します。彼らは兄弟姉妹なのですから！私たちが神の子どもたちを愛しているかどうかは、何によってわかるのでしょうか。私たちが神を愛し、神のことばと戒めを行っていることによってです。

神の子どもである私たちのうちで、神の愛は、行いへと向かわせる力であり、動機であり、感謝です。神の戒めを知り、行うことへと。神から出たいのちを持っている人たちにとって、神の戒めは重荷ではありません。神の愛は燃料のようなものです。決して尽きることなく、彼らのうちで燃え続ける燃料です。神の戒めを、彼らは喜んで行います。

信仰による世への勝利 5:4–5

神から生まれた人は、世に打ち勝つからです。神と神の戒めを拒む世は、私たちの心をも奪い取ろうとしています。私たちが世に合わせるように。一緒になってするように。世と同じようになるように。けれども私たちは、しっかりと立ち、勝利のうちに抵抗します。イエスのもとにとどまります。父と御子と御霊への私たちの信頼こそ、世に打ち勝つ勝利です。信仰によって、私たちはそれをしっかり保ちます。神から遠く離れた世に打ち勝ち、私たちを自分のものだと言い張る世の要求をはねのけることができるのは、誰でしょうか。イエスが神の御子であると信じる人たちだけです。この信仰が私たちを変え、いのちのことばと結びつけます。世も偽預言者たちも、これを信じません。私たちは信じ、そこにとどまり続けます。

私たちが信じるのはどのようなキリストか 5:6–10

イエス・キリストは、私たちのために来られました。完全に人となられたのです。偽教師たちは、バプテスマのときに「神的なキリスト」がナザレの人間イエスの上に下って来たのだ、と主張しています。そして、死の少し前

に、そのキリストは再び彼を離れたのだ、と。けれども、神の御子イエス・キリストは、水の中でヨハネからバプテスマを受けられました。イエスはそれを強く望まれたのです。イエスご自身が、処刑されることを受け入れられました。十字架に釘づけにされることを。流されたその血によって、イエスは私たちを罪からきよめてくださいました。真理の聖霊は、初めからそのことをあなたがたに証ししてきました。そうです、モーセの律法が求めているとおり、私はあなたがたに二人か三人の証人を挙げることができます――水と血と御霊です。彼らは声をそろえて、神の御子が完全に人となられたことを証言しています。イエスは公に姿を現し、人々に仕え始められました。それは、水でのバプテスマから始まりました。そして同じ方、神の御子が、ゴルゴタで死なれたのです。人間は何とでも主張できますが、神の証しは、今もこれからも、それよりも大いなるものです。ですから、それは信頼に値します。最終的な権威なのです。神は、まさにこの三人の証人が証ししたことを、キリストについて証しされました。彼らは声をそろえて、キリストの生涯を言い表しています――御霊、水、そして血です。このキリストを信じる人は、この一致した証しを心のうちに抱き、守っています。神が御子について証しされたことを拒む人は、神を偽り者とするのです。

このキリストを信じる信仰だけが永遠のいのちを与える 5:11–13

神が御子について証ししておられることは、真実で確かです。それは、まったく具体的に私たちに関わっています。神は私たちに永遠のいのちを与えてくださったのです！このいのちは、御子のうちにしかありません。人となり、私たちのために死に、よみがえられたイエス・キリストのうちにです。そして、信仰によって信頼して御子を自分の心と生活に迎え入れた人は、永遠のいのちを持っています。それが、その人の新しい存在となったのです。いのちである御子とともに、その人は神の子どもとしての新しい存在を得ました。御子を迎え入れていない人は、決して永遠のいのちを持つことはできません。

私がこれをあなたがたに書くのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、きっぱりと知るためです――つまり、ただおずおずと、あるいは揺

れ動きながら望んだり感じたりするのではなく、疑うこともなく知るためです。失うことのありうるものとしてではありません。永遠のいのちは、あなたがたの地上のいのちであるあなたがたの魂にたとえることができます。同じように、神の永遠のいのちは、あなたがたのいのちであり、神の子どもとしてのあなたがたの、滅びることのない存在なのです。あなたがたは、神のいのちを持つ神の子どもたちです。

あなたがたが神の御子を信じているかぎり、です。御子が今も、かつても何者であるかを、実に多く含み、表しているその名を信じているかぎり――御子は永遠の方です。人となられました。私たちのために死なれました。よみがえらされました。栄光のうちに迎え入れられました。そこから、再び来られるのです。このすべてを、そしてさらに多くのことを、あなたがたが信じているイエスという名は含んでいるのです。

聞き届けられる祈り 5:14–15

私たちの父である神について、私があなたがたに書いてきたすべてのことは、私たちを神の御前にいるようにと招いています。私たちはいつも神へと引き寄せられています。率直な信頼を持つことができるのです。**子どものような信頼と、思い煩いのない確信に満ちて、神の御前に出ることができるのです。信仰によって、まるで神がほんの一歩先におられるかのように。**神の優しい御顔の前に。とりわけ、神に何かを願うときに。神は私たちの祈りを聞き、聞き届けてくださいます。私たちは、神が望まれることを願うのですから。私たちは神と神のみこころ――神に喜ばれること――を知っているからです。本当にどんなことでも、私たちは神に願うことができます。神が私たちの祈りを聞き届けてくださると知っているからです。願ったことが神によってかなえられるとき、私たちは、それが願いへの答えであることを知ります。神の良い答えです。神はどんな願いも忘れず、ふさわしい時に聞き届けてくださいます。私たちのとりなしの祈りがずっと前のことで、私たち自身がそれを忘れてしまっていたとしても。

罪と死、世と悪い者、真実な方 5:16–21

神の子どもたちは、祈る家族です。とりわけ、家族の一人が明らかに、しかも執拗に神のみこころに反して行動しているときには。それは深刻なことです。ですから、その兄弟や姉妹には、罪を認め、告白し、捨てるために、私たちの祈りが必要です。このような場合、私たちの祈りはどうしても必要です。神が私たちの祈りを聞き届けてくださるなら、その祈りは兄弟や姉妹にいのちを与えるからです。こうして、その人は神が望まれるとおりに立ち返ります——父と御子との、意識された、生きた交わりへと。そして、神の家族の結びつきへと。

死に至る罪があります。兄弟や姉妹、つまり神の子どもたちは、そのような罪を犯すことはできません。この罪は、偽預言者たちと、死の中に横たわっている世全体の特徴です。不義はすべて罪です。神の子どもが行うにしても、偽預言者が行うにしても。けれども、神の子どもの罪は、その人の死を意味しません。しかし世の罪——それは永遠の滅びへと至ります。世は、キリストと、罪のためのキリストのいけにえを拒んでいるからです。

神から生まれ、神の子どもとなった人は、罪を犯し続けることはありません。絶えず故意に、喜んで罪を犯すことはありません。ですから、神の子どもの罪は、死に至る罪ではありません。そうであるはずもないのです。私はこの手紙の中で、真理をはっきりとした対比によって際立たせてきました。白と黒の対比で説明してきました。神から生まれた者が罪を犯さないのは、キリストがその人を守り、しっかりと捕らえていてくださるからです。キリストはいつも、より強い方です。彼は悪い者に対する勝利者です。ですから、悪い者は、神から生まれた者に触れることも、滅ぼすこともできません。

神が私たちを新しく生まれさせてくださったことを、私たちは確かに知っています。それに対して、神を拒む人たちは、悪い者、すなわち悪魔の側にいます。彼らは死の中にいます。この違い、いや、この対立は、私たち自身によって生じたのではありません。それはイエスによって起こったのです。神の永遠の御子の使命は、私たちに神を示すことでした——神の聖なるご性

質、神の光、神の愛を。そして、なぜ御子が私たちのために来なければならなかったのかを、私たちに明らかにすることでした。信じる者にとって、真実な方であるキリストを知ることは、生きるか死ぬかに関わるほど大切です。キリストは、世のあらゆる神々や偶像とは違うからです。私たちがあなたがたに告げ知らせているイエスによって、すべてが成り立ちもし、崩れもします。私たちはこの方と、永遠に切り離されることなく結ばれています。私たちはこの方のうちにいます。真実な方のうちに。守られて。この地上の生活のどこにいようとも、この方のもとでわが家にいるのです。

そして、もう一度、できるかぎりはっきりと言います――**この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。ナザレの建築職人が神なのです。言い表すことのできない方、計り知れない方、永遠の方、いつもおられた方、創造主です。この方こそ、私たちが今持っているいのちです。私たちがそのうちに生きている方です。**

神の御子についてのこの真理を前にして、私は手紙の結びに、ただこのことを強調するほかありません――**イエス・キリストとその栄誉を小さくし、弱め、疑わしいものにするものはすべて――それは偶像であり、どこまでも偶像です。**私の友の皆さん、目に見える偶像も、また人からの誉れや、私たちが執着している富のような「内なる」偶像も、どんな形であれ、あなたがたが容認したり、賛美したりすることのないよう、気をつけてください。

ヨハネの手紙第二

長老ヨハネが、あなたがたに書き送ります。羊飼いとして、あなたがたのことを心にかけている者です。あなたがた、選ばれた婦人とその子どもたちへ。私が心から愛している、小さな信仰の共同体であるあなたがたへ。私が言うのは、神の真理から出る愛のことです。そしてまた、イエス・キリストから出る愛です。イエス・キリストを真理として知り、愛しているすべての人も、あなたがたを愛しています。イエスご自身である真理こそ、この愛の土台であり、指針であり、尺度です！イエス・キリストが私たちのうちにおられるので、真理は私たちのうちにとどまります。いつまでも、永遠に！信じる者は皆、永遠に神の愛の交わりのうちにいるでしょう。永遠のいのちのうちに。

神の恵み、あわれみ、平安が、私たちとともにあります。あなたがた一人ひとりとともに――日ごとに。天におられる私たちの父、神から与えられるものです。同じように、父の御子イエス・キリストからも。この方も神です。子なる神です。人となり、神の真理と愛を私たち人間に明らかにしてくださった方です。この真理と愛のうちに、私たちは神の子どもとして生きています！

あなたの子どもたちの中に、真理のうちに歩んでいる人たちがいるのを見て、私は本当にうれしく思いました。彼らは、イエスが私たちにもたらしてくださった父の戒めを果たしています。**ですから、私たちが初めから聞いてきたことを行うよう、あなたがたにお願いします。あなたがたを驚かせるような新しい戒めではなく、古い戒めです――私たちが互いに愛し合うべきだということです。**

父の愛のうちにとどまり、生きるとは、父の戒めを守ることです――御子イエス・キリストの名を信じ、互いに愛し合うことです。父の戒めは、私たちに対する父の愛の表れです。守りの働きもあります。巡回している偽教師たちに対する守りです。今日、多くの惑わす者たちが、宣教熱心にあちこちを

巡り、自分たちの嘘を広めています。彼らは、イエスが肉において来られたのではないと公言し、宣べ伝えています。**彼らは、子なる神が、私たちと同じように完全に人となられたことを否定しています――ベツレヘムでお生まれになったこと。ナザレで育たれたこと。長年、建築職人として働かれたこと。エルサレムの門の外で、十字架の上で死なれたこと。私たちの罪の償いのために。からだをもってよみがえられたこと。そして、人として天に迎え入れられたこと。これらの事実を部分的に、あるいは全面的に否定する人は、惑わす者であり、やがて来る反キリストの共犯者です。**

この惑わす者たちは、現実の危険です。ですから、自分自身に気をつけてください。用心してください！私たちが働いて得たものを失わないためです。あなたがたは、私たちの宣教の働きの実です！あなたがた自身も、永遠のいのちのために働いてきました。神のわざを行い、永遠のいのちに至るように神の名を信じてきたのです。私たちは、約束されている満ちあふれる報いを受けたいではありませんか。その報いは、私たちが真理にしっかりとどまり、その中に生き、キリストについて初めから明らかにされていることを越えて行かないときにだけ与えられます。

あなたがたが初めから聞いてきたキリストの教えにとどまらない人は誰でも、そのような人のうちに神は住んでおられません。人となられた神の御子キリストについての教えにとどまる人は誰でも、父と御子に結ばれています。父と御子が、その人のうちに住んでおられるのです。

もし誰かがあなたがたのところに来て、私が初めからあなたがたに説明してきたキリストについての教えを携えていないなら、その人を受け入れてはいけません。話す機会さえ与えてはいけません。いつも歓迎する客を迎えるように、あいさつしたり迎え入れたりしてはいけません。そのような人を、それでもそのようにもてなしの心であいさつする人は、その人の悪い行いにあずかることになるからです。望むと望まないとにかかわらず。旅をしている教師があなたがたのところに来て、その人がキリストについて真理を語っているかどうかわからないなら、まずそれを確かめてください。それが確かめられたら、その人を受け入れてください。**私たちの主イエス・キリストのこ**

とに関しては、いつもはっきりとした立場をとってください。ここでは、決して中立や無関心があってはなりません。そうでなければ、私たちの報いのすべてが危うくなるのです。

まだまだ書くべきことはたくさんあります。インクと紙で。けれども、そちらへ行ってあなたがたと話すほうが、ずっと良く、ずっとすばらしいのです。顔と顔を合わせて語り合うそのような交わりには、いつも大きな喜びがあるからです。

ここからも、私がともに暮らしている当地の信者たちから、心からのあいさつを送ります。

ヨハネの手紙第三

長老、プレスビテロスである私ヨハネが、私の愛するガイオ、私が真理のうちに愛しているあなたに書き送ります。イエス・キリストによって私たちのもとに来て、これからは神の愛のうちに生きるようにと、私たちの心をとらえた真理のうちに。

愛するガイオ、あなたがすべての点で幸いを得ていることを、私はどれほど願い、そのために祈っていることでしょう。あなたの外なる人も、内なる人もです。あなたが良い、平らな道を歩めるようにと。

あなたに会った兄弟たちが、あなたがどれほど自分の生き方を真理に合わせているかを知らせてくれたことを、私はどれほど喜んだことでしょう。あなたの心のうちにある真理の実が、すべての人に見えていることを、私はうれしく思います。私の子どもたちが真理のうちに歩んでいるのを見ること以上に、大きな喜びはありません。私が真理であるキリストのもとへ導くことを許され、今はキリストに満たされている人たちです。真理を愛のうちにしっかり保ち、信仰の兄弟姉妹と隣人を愛している人たちです。

愛する人よ、あなたが兄弟たちに対してとってきた振る舞いは、真理への忠実さそのものです。あなたがまったく知らない人たちです。この人たちは、ここ私たちの家の教会で、もてなしにおけるあなたの忠実さを証しし、たたえました。そのような兄弟たちが宣教者として旅をしているときには、旅を続けられるよう、彼らに必要なものを整えてあげてください。それは神に喜ばれ、神の栄誉となります。彼らは神に仕えているのです。こうして、彼らの奉仕が支えられます。彼らは自分自身のために旅をしているのではないからです。私たちの主イエス・キリストの御名のために、彼らは出て行ったのです。その方を宣べ伝えるために。その際、彼らは異邦人からの支援を当てにせず、いつもその土地の信仰の仲間を訪ねます。その仲間たちには、彼らを受け入れる義務が、いや、責任があるのです。けれども、惑わす者たちを自分の家に迎え入れてはいけません。本物の宣教者たちだけを迎え入れてく

ださい。**こうして私たちは真理のための同労者となり、主のみわざに積極的に加わる者となるのです。主の王国に。**

愛するガイオ、私は、あなたが属している家の教会に手紙を書きました。この兄弟たちが受け入れられるようにです。けれども、ディオテレペスは私たちの願いを真剣に受け止めません。彼は、彼らの中でかしらになることを好んでいるのです。そして、自分勝手に物事を決めることを。

私があなたがたのところに行ったら、彼のこの拒絶的な態度について思い起こさせ、問いただすつもりです。それは必ずはっきりさせなければなりません。彼は理由もなく、悪意あることばで私たちを非難しているからです。彼はことばだけでは満足せず、私たち皆に仕え、宿を求めている兄弟たちを、あっさり追い返しています。そして、彼らに宿を提供しようとする人たちを妨げています。それどころか、その人たちを家の教会から追い出すと脅しています。それは、信者たちの交わりにふさわしくない振る舞いです。

愛するガイオ、そのような振る舞いに刺激されて、同じように行動してはいけません。**悪を見習うのではなく、善を見習ってください。**単純で明快な決まりがあります――善を行う者は神から出た者です。神は善い方だからです。悪を行う者は、神を見たことがないのです。その人は、神がどのような方であるかを見落としています。神が私たちを受け入れてくださり、私たちも互いに受け入れ合うべきだということを、見落としているのです。

デメテリオも、この追い返された人たちの一人です。この手紙を届ける者として、すべての人から良い評判を得ているにもかかわらずです。彼を受け入れることに、何の妨げもありません。彼にとっては真理が第一です。彼は真理のために立ちます。真理と一致して生きています。私たちもそれを証しします。そして、私たちが真実を語っていることを、あなたはよく知っています。

書くことはまだたくさんあります。けれども、顔と顔を合わせて語り合い、信者たちの交わりの中で分かち合うほうがよいのです。

神の平安があなたとともにありますように。ここの友人たちが、あなたによろしくと言っています。あなたと思いを同じくする友人たちの一人ひとりに、私たちからのあいさつを、直接伝えてください。一人残らず。

結びに

読みながら、神があなたに語りかけておられるのを感じ取っていただけたなら、本当にうれしく思います。神がどのように励まし、教え、また、神から出たものではなく、それゆえ私たちを損なうあらゆるものについて警告しておられるかを。

神があなたについて、またあなたに直接語ってくださったすべての良いことを、神に感謝してください。

ご質問があれば、私にメールをお送りください：hj-ronsdorf@t-online.de

新約聖書のほかのテキストは、www.hans-joerg-ronsdorf.de でご覧いただけます。

ここで、いくつかの大切なヒントを挙げておきます：

聖書を読んでください。できれば、定期的に。

ほかの人たちと一緒に聖書を読んでください――そして、それについて語り合ってください。

神がご自分のことばをあなたにとって生きたものとしてくださるように祈ってください――まるで神があなたに直接語りかけておられるかのように。

本文を声に出して、二度続けて読んでください。

本文に、次のような問いを投げかけてみてください：

この本文に、あなたならどんな見出しをつけますか。

この本文は、神とイエスについて何を語っていますか。

この本文は、人間について何を語っていますか。

この本文から、私たちは何を学びますか。

私たちは何をすべきでしょうか。

このみことばは、私たちをどのように励ましていますか。

また集まったときには、あなたの経験や体験について話し合ってください。

イエス・キリストを愛し、あがめ、聖書を大切にし、読み、真剣に受け止めているキリスト者たちとの接触と交わりを求めてください。